

否定過去動詞接尾辞 -(a)naNda などが内包する -(a)naN- の起源

黒木 邦彦

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所

kujonjaroo9215[at]shoin.ac.jp

The origin of -(a)naN- in the negative-past verb suffix -(a)naNda and similar suffixes

KUROKI Kunihiko

Kobe Shoin Women's University Institute for Linguistics Sciences

Abstract

本稿では、西日本方言の否定過去動詞接尾辞 -(a)naNda (e.g. 知らなんだ、上げなんだ) などが内包する -(a)naN- の起源を、東日本方言の否定動詞接尾辞 {-a)nap-} の同族に求める。-(a)naNda は、その音形と意味とを踏まえれば、-(a)naN- と -da {-i)tar-} とに分析できよう。-(a)naN- の基底形は、テ形接尾辞に先行する動詞語幹の末尾子音 n、m、b が東日本方言などにおいて N で実現することを考慮するに、{-a)nan-}、{-a)nam-}、{-a)nab-} のいずれかであろう。これらのうち、{-a)nan-} は、否定動詞接尾辞 {-a)n-} の連続体と見做しうる。しかし、このように考えるのであれば、種々の否定表現のうち、否定過去表現においてのみ否定接尾辞を重ねる動機や意義を説明せねばなるまい。一方、**{-a)nam-, -(a)nab-} は、東日本方言の否定動詞接尾辞 {-a)nap-} に音形と意味との両面で類似するものの、その確例はどの時代・地域にも見当たらない。ただし、**{-a)nam-, -(a)nab-} と {-a)nap-} とについては、音声的・音韻的妥当性に富む派生関係を考えうる。更に、**{-a)nam-, -(a)nab-} 起源説は、「ナツタ」「ナムシ」とそれぞれ表記される、2種類の否定過去動詞接尾辞の存在を説明するに良い。

In this paper I consider that -(a)nan- in the negative-past verb suffix -(a)naNda and similar suffixes in Western dialects of Japanese is derived from cognates of the negative verb suffix {-a)nap-} in Eastern dialects. -(a)naNda can be divided into -(a)naN- and -da {-i)tar-} on the basis of its form and meaning. The underlying form of the -(a)naN- would be {-a)nan-}, {-a)nam-}, or {-a)nab-} because {n}, {m}, and {b} at the ends of verb stems are realized as N as in Eastern

dialects when followed by a sandhi verb suffix. Although {-a)nan-} can be regarded as a sequence of the negative verb suffix {-a)n-}, we cannot explain why this negative suffix is duplicated only in negative-past expressions. **{-a)nam-} and **{-a)nab-} resemble the negative verb suffix {-a)nap-} in Eastern dialects both formally and semantically, whereas certain evidences of **{-a)nam-} and **{-a)nab-} are never seen in any area and period. However, as for **{-a)nam-, -a)nab-} and {-a)nap-}, we can find out phonetically and phonologically valid derivation between them. The theory based on presumption that **{-a)nam-} and/or {-a)nab-} existed in former times is good to explain existence of the negative-past verb suffixes ナツタ and ナムシ.

キーワード: 日本語、アスペクト、語形成、動詞、名詞

Key Words: Japanese language, aspect, word formation, verb, noun

1. はじめに

本稿では、日本語音韻論・形態論の成果に基づいて、西日本方言の否定動詞接尾辞 $^{-a}nanda$ 、 $^{-a}nande$ 、 $^{-a}nandu^1$ など (以下、 $^{-a}nanda$ で一括) が内包する $^{-a}nan-$ の起源を考察し、妥当性に富む新説を唱える。具体的には次のとおり。

- (1) a. まず、テ形接尾辞に先行する語幹末子音 n, m, b が東日本方言などにおいて N で実現することを以って、 $^{-a}nan-$ の基底形を **{- $^{-a}nan-$ }, **{- $^{-a}nam-$ }, **{- $^{-a}nab-$ } と推定する。
- b. 次に、否定動詞接尾辞 {- $^{-a}n-$ } の連続体と分析しうる **{- $^{-a}nan-$ } を形態的妥当性の面から棄却する。
- c. 最後に、音形と意味との両面で東日本方言の否定動詞接尾辞 {- $^{-a}nap-$ } に類似する、**{- $^{-a}nam-$ }, $^{-a}nab-$ } を現時点における有力候補とする。

本研究の目的は次の2点に有る。

- (2) a. $^{-a}nanda$ の起源として十分に有りうるものを示し、日本語の史的研究および変種研究 (特に方言研究) の可能性を広げる。
- b. 「*な*んた/だ」「*ナ*ンタ/ダ」「*ナ*ツタ/ダ」「(a)*nanda*」と表記される、この接尾辞の音素表記および音価²を考察し、15–17 世紀頃における音声・音素と表記との関係を僅かながらでも明らかにする。

¹p. 92 に記号・略号一覧。本研究では、時代や地域を異にする日本語変種を複数取り上げるので、変種間の小異を捨象した音素記号にローマ字を代用する。// でこれを括らないのは、特定変種の音素記号と区別する目的に拠る。

²濱田 (1949a; 1949b) や黒田 (1967) が指摘する、促音と清音との親和性および撥音と濁音とのそれを踏まえるに (e.g. *tootta* ‘取った’ :: *tonda* ‘飛んだ’; *zaqpu* ‘ものが水に飛び込んだ音 (軽め)’ :: *zanbu* ‘同左 (重め)’; *sjooben* or *sjonben* ‘小便’)、*ナツダ* は *naqda* **[n^hed^h.de] (** は推定形ないし再構形を意味する。以下同様) ではなく、*nanda* **[n^hen.de] を表象しているのではなからうか。そして、*ナツタ* も、タ行仮名が濁音 d にも当てられることを考慮すれば、*ナツダ* に同じく、*nanda* の表象とも見做しうる。なお、本研究は、「*な*んた/だ」「*ナ*ンタ/ダ」「*ナ*ツタ/ダ」が $^{-a}nanda$ の表象たることを前提としている。(i) これらの文字列が真に $^{-a}nanda$ の表象たるか、(ii) $^{-a}nauda$ を表しうるか (§ 4.3 も参照)、そして、(ii) 15–17 世紀において $^{-a}nanda$ と $^{-a}nauda$ とが弁別的であったかなどは、別の機会に突き止めたい。

2. 研究対象

本研究の対象たる *-^ananda* とは、15 世紀から現在に至るまでおもに西日本で用いられている否定動詞接尾辞である (湯澤 1929, 205–06; 矢澤 1990; 京 2003)。次のとおり、意味的には、子音動詞語幹と連声を起こす、{-ⁱtar-} ‘PST’、{-ⁱte} ‘ATT’、{-ⁱtu} ‘PARA’ などのテ形接尾辞 (黒木, 2014) と極性のみを違えている。

- (3) a. *cono nijū yonen amari minanda Guenji no xirafataga*
 kono nizjuu+jonen+amari mi-**nanda** genzi=no sira+pata=ga
 此の 二十+余年+余り 見_る-NEG.PST.NML 源氏=GEN 白+旗=NOM
 ‘この 20 余年余り見なかった源氏の白旗が’³ (天草版平家、1974)
- b. 沈メタレトモ 後悔 セナンタシソ。
 sidume-tar-edo=mo kookai se-**nandasi**=zo
 沈め_る-PST=CCSV=も 後悔 する-NEG.PST:NML=CFM
 ‘沈めたけれども、後悔しなかった(んだ)⁵ぞ。’ (史記抄、11、47 ウ)
- c. *itçu cayerō tomo xirenandareba, cocorobososa ua*
 itu kaer-au=to=mo sir-e-**nandar**-eba kokoro+boso-sa=wa
 いつ 帰_る-VOL=QUOT=も 知_る-INAV-NEG.PST-SEQ 心+細_い-NMLZ=TOP
caguri ga nacatta to,
kagir-i=ga na-kaq-ta=to
 限_る-NMLZ=NOM 無_い-VLZ-PST:NML=QUOT
 ‘「いつ帰るとも知れなかったから、心細さは限りが無かった」と’
 (天草版平家、195)
- d. 最前から 色々の 物 かせと いへども かざなんで
 saizen=kara iro-iro=no mono kas-e=to ie-domo kas-**anande**
 最前=ABL 色-色=GEN 物 貸_す-IMP=QUOT 言_う-CCSV 貸_す-NEG.ATT
 ござる 程に
 gozar-u podo=ni
 御座:有_る-NML 程=DAT
 ‘さっきから色々の物(を)貸せと言うのに、貸さないでおりますから’
 (虎明本、なべやつばち: 上 132)⁶
- e. 星カ ミヘツ ミヘナンツ シテ 稀ナルソ
 posi=ga mie-tu mie-**nandu** si-te mare=nar-u=zo
 星=NOM 見え_る-PARA 見え_る-NEG.PARA する-ATT 稀=COP-NML=CFM
 ‘星が見えたり、見えなかつたりして、稀なん(だ)ぞ。’
 (四河入海、9 (1)、10 ウ)

- f. 物 しつたり 物 しらなんだり 物しり 物しらずサ
 mono siq-tari mono sir-anandari mono+sir-i mono+sir-azu-Ø=sa
 物 知る-PARA 物 知る-NEG.PARA 物+知る-NMLZ 物+知る-NEG-NMLZ=INFM

‘物(を)知つ(て)たり、物(を)知らなかつたり。物知り、物知らずさ。’

(浮世床、初編中: 278)

3. ^ananda の構成

^ananda の起源ははっきりせず、その構成については諸説有る。これまでの説は、『日本国語大辞典 第二版』(10: 338)において次のように整理されている。

- (4) 「ぬ」 [= {-^an-} ‘NEG’]⁷の過去形に相当し、打消の「ぬ」及び過去・完了の「た(たり)」 [= {-ⁱtar-} ‘PST’] を構成要素とすることは確実であるが、「なんだ」の語形の成立については、諸説あるものの明らかでない。「ぬあつた」 [= {-^an-ⁱu#ar-ⁱtar-} ‘NEG-NML#有る-PST’] からの変化とみるのが最も妥当かと思われるが、「なつた」という促音形から「なんだ」という撥音形に転じるのは、音韻変化としては不自然である。そのため、「なんだ」は、「否定+過去」という連続の不自然さを解消すべく作り出された語形かとする見解も出されている。

^ananda の先行研究を踏まえるに、その起源は、^an- と ⁱtar- とを内包する、{-^an-ⁱu#ar-ⁱtar-} に求められるようである。ただし、以下で述べるとおり、筆者は、^ananda と共存し、かつ、生産性に富む ^an- をその構成要素と認めることに(引いては、{-^an-ⁱu#ar-ⁱtar-} > ^ananda という起源説にも)疑いを持っている。

なお、「そのため」以降の見解、つまり、^an- と ⁱtar- とを内包する形式が「否定+過去」という連続の不自然さを解消すべく、^ananda という形態で実現したと考えることは根拠に欠ける。この見解は、形態変化の妥当性の面からも説得的ではない。

3.1. ^ananda の -da

^ananda の -da は、その音形および意味を踏まえれば、先行研究に同じく、テ形接尾辞と見てよからう(以下、この分析に拠って、^anan-da と表記)。『延慶本平家物語』(三末、82ウ)に見られる、否定過去動詞接尾辞の孤例「ナムシ」(山内、1989, 34)⁸が過去動詞接尾辞 {-ⁱsi-} (国文法に言う過去の助動詞「き」)を内包している(つまり、「ナム-シ」と分析できる)らしいことは、その根拠に挙げられよう。次のように、(3)のそれぞれに極性でのみ対立する動詞接尾辞が存在すること(太字部参照)も、その根拠と成ろう。

⁷引用文中の〔 〕は黒木注。以下同様。

⁸nausi, naqsi, nauzi, nanzi のいずれにも解釈しうるか。9-12世紀の訓点資料においてテ形連声を「ム」で表記した例(e.g. カナムテ {kanap-ⁱte} ‘適_テ-ATT’, ワタムテ {watar-ⁱte} ‘渡_テ-ATT’, etc.; 中田ほか 1972: 78-79)も考慮に入れてのことではあるが。

(5)	PST:NML	PST:NML	PST-SEQ	ATT	PARA	PARA
NEG:	^{-a} nan-da	^{-a} nan-dasi	^{-a} nan-dar-eba	^{-a} nan-de	^{-a} nan-du	^{-a} nan-dari
Ø: ⁻ⁱ ta	⁻ⁱ tasi ⁹	⁻ⁱ tar-eba	⁻ⁱ te	⁻ⁱ tu	⁻ⁱ tari	
	-da	-dasi	-dar-eba	-de	-du	-dari

3.2. ^{-a}nanda の ^{-a}nan-

^{-a}nan-da の起源解明において問題視されるのは、^{-a}nan- である。たとえば、濱田 (1949b, 35) は、^{-a}nan-da と ^{-a}zaq-ta ‘NEG-PST とを同源と見て、その起源を古代日本語の「ずありたり」、つまり、{^{-a}zu-Ø#ar-ⁱtar-} ‘NEG-ADVL#有_る-PPST’ に求めている。しかし、この説は次の理由から妥当性に欠ける。

- (6) a. 初頭音節の onset¹⁰(ここでは n と z と) の違いを看過している。
 b. いわゆる連声濁 (高山, 1992; 肥爪, 2003) や黒田 (1967) の研究成果を踏まえると、鼻音性に欠ける {ar-ⁱtar-} から ^{-a}nanda の nd は出力しえない。濱田は、^{-a}nan-da :: ^{-a}zaq-ta の類例として kon=da :: koq=ta {koto=da} ‘事=COP:CCL’ を挙げているが、これらは類例とは言えない。

まずは、(6a) について述べる。n と z とは、たとえば、鹿児島県上甕島瀬上集落の方言¹¹においては音声的に近いけれども¹²、音韻的に統一/混同されることは、どの変種においても、更に、個々の形態素に限っても、まず無い。

次いで、(6b) について。^{-a}nan-da :: ^{-a}zaq-ta においては、^{-a}nan-da が実現する過程で、{⁻ⁱta} ‘PPST’ の初頭清音が先行子音 (= 動詞語幹末の子音) の鼻音素性を受けて、濁音化する¹³。一方、kon=da :: koq=ta においては、koq=ta が実現する過程で、まず、音節数抑制の目的から、2 音節の {ko.to} ‘事’ が 1 音節の {koq} に転じる。そして、{koq} に続く {=da} ‘COP:CCL’ の初頭濁音が、音素配列規則に適う清音に転じる (e.g. {qd} → qt; cf. *qd) のである¹⁴。

『日本国語大辞典 第二版』が妥当性を認めるに同じく、京 (2003) も、「^{-a}なんだ」の意味用法との関係から見れば、その語構成は「ぬ+あった」の熟合形によるのではない

⁹10–12 世紀の和文に見られる ⁻ⁱtar-isi {⁻ⁱtar-ⁱsi-Ø} ‘PRF-PST-NML’ に由来する。

¹⁰音節構成要素のひとつ。日本語において促音と撥音と (= 1 モーラ相当の阻害音と鼻音と) が弁別的分節音 (つまり音素) に成ってからの音節構造は、(i) 音節主母音に相当する、nucleus (N) という必須要素と、(ii) 子音、半母音、促音/撥音/母音にそれぞれ相当する、onset (O)、medial (M)、coda (K; consonant の C との混同を避けて) という選択要素とから成る OMNK と見做しうる。

¹¹本稿に言う方言はいずれも老年層のもの。

¹²同方言では、歯茎閉鎖鼻音 [n] が n に、硬口蓋閉鎖鼻音 [ɲ] が z に対応。

¹³厳密には、「清音音素」「子音音素」「濁音音素化」と呼ぶべきところであるが、この文脈のように音声と混同する虞れが無ければ、「音素」は略す。以下同様。

¹⁴音素配列規則に基づくこのような交替は、日本語においてしばしば見られる (e.g. 東北、北関東: {ar-^u=be} ‘有_る-NPST=INEM’ → aq-pe {ep}.pe; 長崎県口之津: {kak-te#jar-ta} ‘書_く-ATT#や_る-PPST’ → kjaq#zjaq-ta [kʰed̚.dzɛt̚.te]; 瀬上: {kak+jo-ka} ‘書_く+良_い-NPST’ → kaq+zjo-ka [kʰed̚.dzo.ge] ‘書_く:POT:NPST’)

かと」見ている。ただし、「ぬあった」、つまり、{-^an-^ru #ar-ⁱtar-} ‘NEG-ADVL#有_る-PPST’は、文法的には許容される構成ではある(‘～しないのが有った’とは解釈できる)ものの、否定過去表現には当たらない。よって、「「なんだ」の意味用法との関係から見れば」、却って、別の起源を考えなければならないのである。

4. -^anan- の起源に対する新説

4.1. -^anan- の基底形

-^anan- の基底形は **{-^anan-}、**{-^anam-}、**{-^anab-} のいずれかであろう。この推定は、テ形接尾辞に先行する語幹末子音 n, m, b が東日本方言などにおいて次のように N で実現することに拠る (e.g. {-^anan/m/b-ⁱtar-} ‘NEG-PPST’ → -^anan-da)。

(7)	{sin-te}	{jom-te}	{tob-te}
	死 _ぬ -ATT	読 _む -ATT	飛 _ぶ -ATT
	↓	↓	↓
	sin-de	jon-de	ton-de

4.2. **{-^anan-}: 否定動詞接尾辞 {-^an-} の連続体

**{-^anan-} に当たる形式としては、否定動詞接尾辞 {-^an-} の連続体が考えられる (e.g. {-^an-^an-tar-} ‘NEG-NEG-PPST’ → {-^anan-tar-} → -^anan-da)。この説は、確実に存在し、かつ、-^anan- と意味的に共通する接尾辞に拠る点では妥当に映る。しかし、このように考えるのであれば、種々の否定表現のうち、否定過去表現においてのみ否定辞を重ねる動機や意義を説明せねばなるまい。なぜなら、日本語には、同一機能の派生接尾辞を他意無く重ねる例が見られないからである¹⁵。{-^an-^an-tar-} → -^anan-da を想定するに足る根拠を欠くため、-^anan- の推定基底形から **{-^anan-} は外す。

4.3. **{-^anam-, -^anab-}: 東日本方言の否定動詞接尾辞 {-^anap-} の変種

**{-^anam-, -^anab-} という否定動詞接尾辞は思い当たらないものの、音形と意味との両面でこれらに類似するものとしては、次に挙げる東日本方言の否定動詞接尾辞 {-^anap-}¹⁶が浮かぶ。

¹⁵豊後方言においては可能動詞接尾辞 {-^re-} をしばしば重ねる。ただし、これは単独の {-^re-} とは異なり、「面倒でやっつけられない」という意味を特別に表すのである (e.g. jom-e-n 読_む-POT-NEG:NPST (= 読めない) :: jom-e-re-n 読_む-POT-POT-NEG:NPST (= 面倒で読んでられない)’)。その他の例としては、子音動詞語幹から派生した、jom-asase- 読_む-CAUS’ や kak-asase- 書_く-CAUS’ (cf. jom-ase- 読_む-CAUS’, kak-ase- 書_く-CAUS’) が挙げられる。一見すると、これらは使役動詞接尾辞を連続させた、{jom-^sas-^sase-} 読_む-CAUS-CAUS’, {kak-^sas-^sase-} 書_く-CAUS-CAUS’ とも分析しうる (Sano, 2011)。しかし、その分析にあたっては、(i) {jom-} や {kak-} のように s 以外で終わる子音動詞語幹からのみ -asase- 型使役形式が派生し (母音動詞語幹からは -sase- 型; Okada 2004; Sasaki 2013)、(ii) サ変動詞語幹からは sisase- ‘_す:CAUS’ が産出される (Sasaki, 2013; 佐々木, 2016) という事実を看過してはならない。このことを考慮すると、jom-asase- や kak-asase- は、母音動詞語幹からの派生に同じく、はだか語幹、未然形語幹尾 {-^aØ-}、使役辞 {-sase-} (cf. {-^sase-}) から成る (つまり、使役辞はひとつしか取らない)、{jom-^aØ-sase-} 読_む-SE-CAUS’, {kak-^aØ-sase-} 書_く-SE-CAUS’ と見るべきであろう。

¹⁶{-^an-} ‘NEG’ と {-^aap-} ‘_る続け’ と (共に西日本の動詞接尾辞に同じ) に分析できるか。

- (8) a. 安比豆祢能 久尔乎 佐杼抱美 安波奈波婆 斯努比尔
 apidu+ne=no kuni=wo sa-dopo-mi ap-anap-aba sinob-i=ni
 会津+嶺=GEN 国=INAC BEAU-遠_い-CSL 会_う-NEG-COND 偲_ぶ-NMLZ=DAT
 勢等 比毛 牟須婆佐祢
 se-Ø=mo=to pimo musub-as-ane
 す_る-IMP=INFMQUOT 紐 結_ぶ-CAUS-NEG-LONG

‘会津嶺の国が遠いから。会わないなら、思い出にしてよと、紐(を)結んで欲しい。’
 (万葉集、14、3426)

- b. 水久君野尔 可母能 波抱能須 兒呂我 宇倍尔
 mikukuno=ni kamo=no pap-onos-u ko-ro=ga upe=ni
 水久君野=DAT 鴨=GEN 這_う-ように見え_る-NML 兒-APL=GEN 上=DAT
 許等乎呂 波徹而 伊麻太 宿奈布母
 koto+wo-ro pape-te imada ne-nap-u=mo
 言+緒-APL 延へる-ATT 未だ 寝る-NEG-NML=INFM

‘水久君野に鴨の這うような。(愛しいあの)子の上に言葉の緒(を)延べて、まだ寝ないよ。’
 (万葉集、14、3525)

- c. 多久夫須麻 之良夜麻可是能 宿奈徹杼母 古呂賀
 taku+busuma sira+jama+kaze=no ne-anap-edo=mo ko-ro=ga
 栲+衾 白+山+風=GEN 寝る-NEG-CCSV=も 子-APL=GEN ろが
 於曾伎能 安路許曾 要志母
 oso+ki-Ø=no ar-o=koso je-si=mo
 覆_い¹⁸+着_る-NMLZ=GEN 有_る-NML=こそ 良_い-CCL=INFM

‘白山風が已まないけれども、(愛しいあの)子の襲_{おそ}衣が有るのこそ良いよ。’(万葉集、14、3509)

この説は、何より、**{-^anam-, -^anab-} の確例がどの時代・地域においても見当たらないところに問題を抱えている。その上、{jom/b-ⁱte} ‘読_む/呼_ぶ-ATT’ → jon-de とした連声も、-^anan-da を生んだ、15–17 世紀の西日本方言では確認されないので (cf. 西日本: {jom/b-ⁱte} ‘読_む/呼_ぶ-ATT’ → jon-de)、東日本方言的要素の借用¹⁹も想定せねばならない。

ただし、**{-^anam-, -^anab-} と {-^anap-} とについては、次のように音声的・音韻的妥当性に富む派生関係を考えるので、**{-^anam-, -^anab-} という推定基底形はそれほど悪くもなからう。末尾子音の調音点および調音法を {-^anap-} と共有する、否定動詞接尾辞 **{-^anam-, -^anab-} は存在したかもしれない。

- (9) (**{-^anam-} →) ^{口音化} **{-^anab-} → ^{清音化} {-^anap-}

¹⁹たとえば、現在の関東方言が西日本方言の {-^an-} ‘NEG’ を ^jmase-N ‘POL-NEG:NPST’ や kamaw-an ‘構_う-NEG:NPST’ においてのみ用いるに似たこと。

{^{-a}nap-} を派生させうる、**{-^anam-, -^anab-} に -^anan- の起源を求め、東日本方言的要素の借用も想定することは、「ナツタ」と表記される否定過去動詞接尾辞の存在を説明するに良い。なぜなら、この説に拠れば、「ナツタ」が表象しうる naqta も、{-^anap-ⁱtar-} という入力より得られるからである。更に、§ 3.1 で触れた、否定過去動詞接尾辞「ナムシ」が表象しうる nausi および naqsi (注 8) さえ、{-^anap-ⁱsi-} から得られる。

5. まとめ

本稿では、日本語音韻論・形態論の成果に基づいて、西日本方言の否定動詞接尾辞 -^ananda が内包する -^anan- の起源を考察し、妥当性に富む新説を唱えた。具体的には次のとおり。

- (10) a. まず、テ形接尾辞に先行する語幹末子音 n, b, m が東日本方言などにおいて N で実現することから、-^anan- の推定基底形として **{-^anan-}、**{-^anam-}、**{-^anab-} を立てた。
- b. 次に、否定動詞接尾辞 {-^an-} の連続体と分析しうる **{-^anan-} を形態的妥当性の面から棄却した。
- c. 最後に、音形と意味との両面で東日本方言の否定動詞接尾辞 {-^anap-} に類似する、**{-^anam-, -^anab-} を現時点における有力候補とした。

記号

[]: 音声表記; { }: 基底表記; :: 音節境界; -: 接辞境界; =: 接語境界; +: 語幹境界; -: 重複; #: 統語的語境界; A/BC: AB or AC (*A or BC); { A/BC}: A or BC; A(B): A or AB; ^A: 特定の音韻的条件においてのみ現れる音素; A → B: 入力 A からの出力 B; A > B: A から B への通時的変化; *: 文法的に不適格; **: 推定形ないし再構形

略号

ABL= ablative (奪格), ADVL= adverbial (連用), APL= associative plural (連合複数), ATT= attaining (限界達成), BEAU= beautifying (美称), CAUS= causative (使役), CCL= conclusive (終止), CCSV= concessive (譲歩), CFM= confirming (確認), COND= conditional (条件), COP= copula verb root (繫辞動詞語根), CSL= causal (原因), DAT= dative, allative, locative, and essive (与格・向格・処格・様格), GEN= genitive and nominative (属格・主格), IMP= imperative, INAC= inactive case (静格), INAV= inactive voice (所動), INFM= informing (通達), LONG= longing (希求), NEG= negative (否定), NML= nominal, adnominal, and conclusive (準体・連体・終止), NMLZ= nominalizer (名詞語幹化), NOM= nominative and genitive (主格・属格), NPST= nonpast (非過去), PARA= parallel (並列), POL= polite (丁寧), POT= potential (可能), PRF= perfect (完了), PPST= past and perfect (過去・完了), PST= past (過去), QUOT= quotative (引用), SE= stem ending (語幹尾), SEQ= sequential and causal (継起・原因), TOP= topic (主題), VLZ= verbalizer (動詞語幹化), VOL= volitive and inferential (意志・推量).

参考文献

- 中田祝夫ほか(1972)『講座国語史 2: 音韻史・文字史』大修館書店.
- 濱田敦(1949a)「促音と發音(上)」『人文研究』 1(1): 91-114., 11月.
- 濱田敦(1949b)「促音と發音(下)」『人文研究』 1(2): 32-52., 12月.
- 肥爪周二(2003)「清濁分化と促音・撥音」『国語学』 54(2): 95-108.
- 黒田成幸(1967)「促音及び撥音について」『言語研究』 50: 85-99.
- 黒木邦彦(2014)「テ形動詞に関する音韻規則の一般性と特殊性」『語文』 102: 1-8.
- 京健治(2003)「否定過去の助動詞「なんだ」に関する一考察」『語文研究』 96: 48-59.
- 高山倫明(1992)「連濁と連声濁」『訓点語と訓点資料』 88: 115-24., mar月.
- Okada, Judy (2004) Causative *sa*-insertion in Japanese: Verbal and sentential patterns. 『日本語文法』 4(2): 69-88.
- Sano, Shin'ichirō (2011) Real-time demonstration of the interaction among internal and external factors in language change: A corpus study. 『言語研究』 139: 1-27.
- Sasaki, Kan (2013) Another look at *sa*-insertion in Japanese. *Studies in Phonetics, Phonology and Morphology* 19(1): 179-90.
- 佐々木冠(2016)『現代日本語における未然形』: 21-42. くろしお出版.
- 山内洋一郎(1989)『中世語論考』 清文堂出版.
- 矢澤真人(1990)「否定越え: 「なんだ」の成立をめぐる一試案」『国語国文論集』 19: 94-106.
- 湯澤幸吉郎(1929)『室町時代言語の研究』 大岡山書店 [復刻版: 風間書房、1970年].

Author's web site: <http://www.shoin.ac.jp/>

(受付日: 2018年1月10日)